

彫刻の調査と研究経過

美術工芸研究室・彫刻

一、俊乗房重源の研究

俊乗房重源が東大寺の復興事業を推進するためには、諸国で働いた仕事の数々は、彼の南無阿弥陀仏作善

集にきわめて詳細に書き残されていて、その実際をいまによくうかがうことができる。たゞその中で、いまの岡山県に含まれている備中と備前の兩國のことは、例えは作善集にも

備中別所 浄土堂

吉備津宮 神宮寺堂并御佛舍

應願堂

備前因 常行堂

國府大湯屋

豐原庄豊光寺 湯屋

國中諸寺修造廿一所

とあるだけで、これ等がはたしてどこにあつたものか、あまり明らかにされていなかつた。しかしこの重源研究においてはかなり早くから、備中別所をいよいよよく似て、これがやはり重源ゆかりのものではないかといふことが考へられたわけである。これ等ははたしかに重源研究に貴重な資料をえたものと信じて疑はない。

二、興正菩薩觀尊の研究

なおこの備中、備前両国のことにはまだわからぬところがたくさんあるので、三十五年度においては主としてこの両国のことと調べてみた。その結果として、まず第一に吉備津神社にある十一面の菩

薩面の中の八面は、いわゆる藤原和様の古い傳統をかなりよく伝えたものであるがやはり鎌倉初期頃の

二十五菩薩米迦面の一部であることが推定され、したがつてこれがおそらく重源による備中別所浄土堂に関する遺品ではないかと推察された。次の第二は、金山寺（岡山市金山寺）にかなり数多く傳つてゐる古文書類で、この中に建久四年（一一九三）六月の金山寺住僧等解説があり、これの袖書に重源自筆

の外題と花押があることによつて、この金山寺が重源による「（備前）國中諸寺修造廿一所」の中の一寺であることが知られた。なお第三は、能満寺址（総社市尾尾新山）の鉄湯釜で、これは径六尺一寸余、高三尺五寸のきわめて大形なものであるばかりでなく、その恰好や造作が周防阿弥陀寺の鉄湯釜にひじょうによく似て、これがやはり重源ゆかりのものではないかといふことが考へられたわけである。これ等ははたしかに重源研究に貴重な資料を得たものと信じて疑はない。

対象がひじょうに多いので、その基礎資料の調査だけにでもなかなかひまどるわけであるが、本三十

すなわちその第一は、觀音の本懐西大寺の大黒天立像で、この像は寺傳（行実年譜）によると、建治二年（一二七六）九月に弘師善春が觀音の命によつて造つたものと傳えられてゐるが、たしかにその様式は古く、例のあまり肥満していない、すつきりとした形姿をした大黒天で、作りもかなり実物的、しかもきわめておだやかな手法をもつて、かえて生彩のある表現をなしてゐるものである。なおこの像にはその像内にかなり多くの納人物があるらしい。

聖德太子像頭部内部（元興寺極楽坊）

で、次の機会にそれ等を調査することができるよう期待している。次の第二は、元興寺極楽坊の聖德太子像で、これはこの像の修理に際して、その頭部内から玉眼のよさえ木その他の記された墨書きや、二基の小さな木造五輪塔などが見出されて、これ等によつてこの像が一層、觀音ゆかりのものであることがたしかめられた。その第三は、小塔院（奈良市西新屋町）で、この寺にはかつて文永十年（一二七三）に觀音の徒の良觀や性源などによつて造られた清原寺迦陵像などもあつたが、いまは見るだけもなく寂れはてている。しかしこの寺はなんといつても平安初期に護命僧などの住した名刹であり、また中世には觀音による真言律宗の教えをよく傳えたところで、いまはほんと知る人もないが、ここにかなり數多くの中世の在銘石塔婆が放置されている。本年度はただそれ等の存在を確認した程度に止めたが、今後

機会を見つけて、更によくそれ等の石塔婆類を調査したいと思つてゐる。その第四は、三重県下の律宗関係寺院で、これには無量寿福寺をはじめとして、宝嚴寺、不動寺、崇福寺、長隆寺、佛勝寺、徳月寺、金仙寺、興典寺、福善寺等がある。そこで本年度にはこの中でも無量寿福寺（上野市下神戸）と金仙寺（上野市比自岐）と福善寺（鈴鹿市玉垣町）との調査を行なつて、多少の觀音関係史料を見出し、これも今後の調査に期待するところが大きい。

大黒天像（西大寺）

藤原彫刻の研究

藤原彫刻の研究は、昭和三十一年度以降の研究によつて一まずその造立年次などがたしかめられる店舗資料の調査を終つたので、本三十一年度においては主として和様の形成にもつとも大きな要素となつたと思われる奈良地方あるいはそれに近い地域の藤原期の作例をとり上げてみた。すなわち岩船寺の阿弥陀如来像をはじめとして、六波羅賣本堂の藥師如來像、元興寺極楽坊本堂の阿弥陀如來像、法隆寺講堂の藥師三尊像、藥師寺の文殊菩薩像、淨瑠璃寺の藥師如來像、興福寺の板彌十二神将像等の如きのものである。これ等によつて和様彫刻のもつ屈和な柔味のある表現といらうものが、様式史的にいかに発展していったものであるとか、そんな様式をつくり上げている面の構成等はたしてどんな造作を施し

(如運)

一、古版木類

なおこの寺の鎮守笠山神社の神像は、興津彦神と興津姫神との一具像で、これが享保十七年(一七三二)に清水隆慶によつて造られたものであることが知られている。

2、元性院調査

元性院とは、京都府宇治田原町奥山田にある無名の小刹であるが、ここに藤原時代の年記がある大般若経を伝えてゐるところで、その住職佐藤寿宏師の要請によつてその一部を調査したが、たしかにその中には永治二年(一一四一)をはじめとして仁安二年(一一六七)、嘉定元年(一一六九)、治承四年(一一八〇)等の奥書きがあるもののがなりあつて、これはまた他日ゆづくりと調査をしなければならないものだと思う。

3、西吉野村調査

この調査は奈良県吉野郡西吉野村の教育委員会の要請によつたもので、同村内の立川渡辻堂、正林寺(川岸)、圓光寺(陰地)等の文化財をよく簡単に調査した。この中で注意すべきものは圓光寺の定専上人坐像で、これは本造彩色、像高二尺六寸のまことに本格的な肖像であつて、造立もおそらく室町初期を下るものではないと思われる。したがつてこの像は真宗因縁の肖像としても古く、またすぐれたものといわなければならないだろう。